

## 幼児理解の理論と方法

### Theory and Method of Understanding Infants

小 芝 隆

KOSHIBA Takashi

#### I はじめに

幼稚園は、「…幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする」（学校教育法第22条）施設であり、保育所もまた「…保育に欠ける乳幼児の保育を行い、その健全な心身の発達を図ることを目的とする」（新保育所保育指針）施設である。幼児の心身の発達を助長するという点では、家庭における保育も同様である。幼児の心身の発達を助長するためには、幼児理解が不可欠である。

本論では、幼児理解の考え方と理解を深めるための保育者養成のあり方を論じる。

#### II 発達の仕組みの理解

幼児は周囲の物や人や言葉の環境に関わることを通して、自らの人格と運動能力の発達を獲得していく。その際最も重要なことは、幼児が環境に主体的・自発的に関わることである。幼児教育の創始者といわれるフレーベル（Fröbel, Friedrich 1782年～1852年）の教育実践の中心をなす考え方は「自己活動の原理」<sup>1)</sup>と呼ばれ、フレーベルに次いでその後幼児教育の確立に大きな貢献をなしたモンテッソーリ（Montessori, Maria 1870年～1952年）の教育実践の中心をなす考え方は「自発的集中活動の原理」<sup>2)</sup>と呼ばれている。この「自己活動の原理」も「自発的集中活動の原理」も、幼児の発達の原動力は、幼児の主体的・自発的活動であることを示す概念として理解することができる。

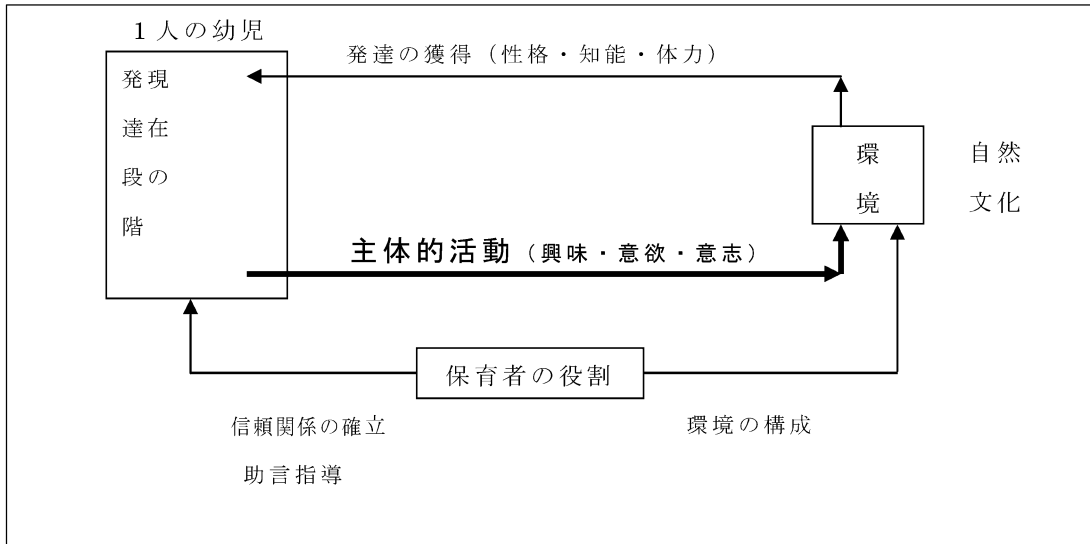
この意味で子どもの環境に関わる興味や意欲という主体的活動を導き出すことが、幼稚園教諭や保育士（以下 保育者）の役割である。その役割は、(図1)に示したように大きく分けて二つあると考えることができる。ひとつは幼児の遊びや基本的生活を充実させるための「環境の構成」であり、もうひとつは幼児との間に「信頼関係の確立」を図り、適切な「助言指導」を行うことである。

---

こしば たかし (幼児教育学科)

幼児の発達の仕組みは、(図2)のように保育における5領域を構造化して把握することによっても理解できる。5領域とは、保育の「ねらい」と「内容」を幼児の発達の

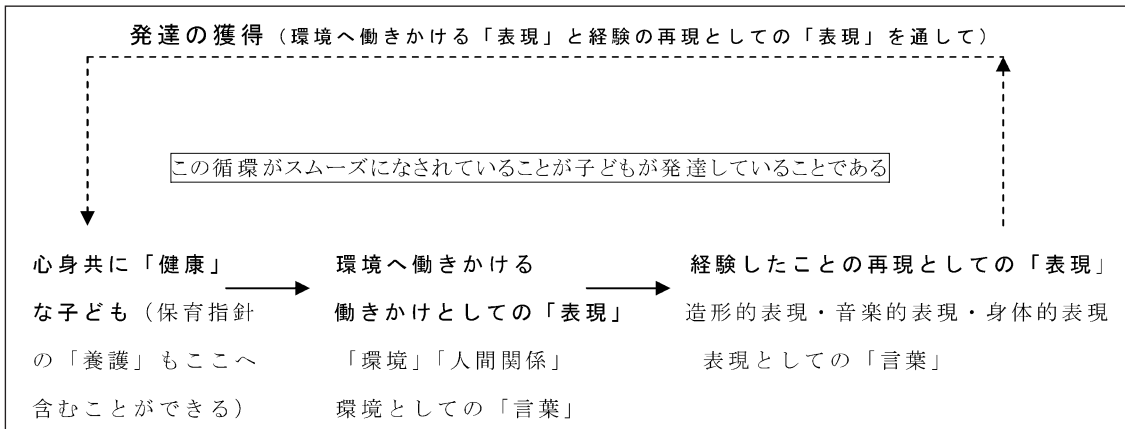
図1 発達の仕組み



側面からまとめたもので、心身の健康に関する領域「健康」、人とのかかわりに関する領域「人間関係」、身近な環境とのかかりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」及び感性と表現に関する領域「表現」である。保育の「ねらい」とは、幼児期の終わりまでに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情、意欲、態度のことであり、「内容」とはねらいを達成するために保育者が指導すること、つまり幼児自身に経験させたいことである。

5領域の構造化は、(図2)に示したとおりである。心身共に「健康」な子どもが、主体的に周囲の「環境」「人間関係」そして環境としての「言葉」(聞く言葉・読む言葉)へ働きかける「表現」、さらに経験したことを造形的・音楽的・身体的あるいは「言葉」(話す言葉・書く言葉)で「表現」することを通して、発達を獲得していく。

図2 5領域の構造化



### Ⅲ 幼児理解

幼児理解には、発達的理解と共感的理解の二つの側面がある。

#### 1 発達的理解

幼児の心身が、どのような一般的過程をたどって発達するか、また具体的には造形的活動、音楽的活動、身体運動的活動などがどのような過程をたどって発達するかを理解すること、さらには一人一人の幼児の具体的な発達段階や発達の特徴を理解することは、「環境の構成」にとっても、「信頼関係の確立」や適切な「助言指導」を行う上でも重要なことである。このような客観的な幼児理解を発達的理解と呼ぶことができる。

発達的理解にとって、ピアジェの知能の発達理論<sup>3)</sup>やエリクソンの心理社会的発達段階説<sup>4)</sup>は有効な手がかりを提供してくれる。二人の理論の具体的説明は省くが、概略は以下のとおりである。

乳幼児と大人の人格の最も大きな差異は、知能の発達にある。ピアジェは子どもの観察を基に、乳児から大人に至る知能の発達を詳しく体系的に説明した。ピアジェは、乳児期（0ヵ月～24ヵ月）を感覚運動的知能段階、幼児期（2歳～7、8歳）を前操作的思考（自己中心的思考）段階と名付けている。

ピアジェは感覚運動的知能段階をさらに6期に分けており、その中でもこの段階における循環反応の概念は、乳児の行動を理解する上でたいへん有効である。また幼児期の前操作的思考段階を特徴付ける幼児の自己中心性（Egocentrism）の概念も、幼児の言動を理解する上で重要で有効な概念である。さらに、児童期（7、8歳～11、12歳）の具体的操作段階、その後の青年期そして大人の形式的操作段階の考え方も、小学生及び中学生以降の大人の知能の特徴を理解する上で有効である。現在日本の教育で課題となっている、幼小の連携を考えていく上でも大切な手がかりを与えてくれる。

エリクソンの心理社会的発達段階説は、自我が家族や社会の人々の中で発達していく様相について、乳児期から老年期までを8つの段階に分けて説明したものである。エリクソン自身は、この説明を発達課題説とは名付けていないが、広い意味で発達課題を示したものと解釈してよいと考えられる。

乳児期（0～1歳）の発達課題を人に対する信頼性、幼児前期（1歳～3歳）は自律性、幼児後期（3～6歳）は積極性としており、以下児童期（6～12歳）は勤勉性、青年期は自我同一性の確立、成人初期は親密さ、壮年期は生産性、そして老年期は統合性としている。幼児前期の自律性と同後期の積極性は、「Ⅱ」で述べた「幼児の発達の原動力は幼児の主体的活動である」の「主体性」と重なる概念として解釈することができる。

幼児期の発達課題を自律性・積極性とし、児童期のそれを勤勉性とする考え方は、ピアジェの考え方同様、幼小の連携を考える上で大切な手がかりを与えてくれる。さらに平成18年の改正で教育基本法に新たに加えられた第11条「幼児期の教育」で、「幼児期

の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであること・・・」と示されたが、「生涯にわたる人格形成」を理解する上でも、エリクソンの生涯にわたる心理社会的発達<sup>5)</sup>の8段階の理解は重要である。

## 2 共感的理解

発達を客観的に理解することによってのみ、「保育者の役割」が図られるわけではない。一人一人の幼児の行動は、幼児と保育者の相互関係を除いて考えることはできない。保育者に信頼感を持ってない幼児は、どんなに望ましい「環境の構成」や「助言指導」がなされても、周囲の人や物や言葉の環境に主体的に関わろうとはしない。

幼児の保育者への信頼は、保育者に信頼されることによって初めて生まれる。保育者の幼児への信頼とは、全ての幼児に内在する幼児自身の成長への欲求と成長する力を信頼することである。このことによって幼児は、保育者が幼児自身に内在する成長への欲求と成長力を信頼していることを無意識のうちに信頼し、それゆえに保育者が自分を絶対的に受容してくれることを信頼するようになる。

幼児の保育者への信頼感<sup>6)</sup>は、保育者が、幼児の立場や考えや感情をあたかも保育者自身のものの如く理解すること、つまり共感的理解から生れる。また、保育者の共感的理解によって、幼児は保育者が自分を絶対的に受容してくれることを信頼して心を開き、幼児のありのままの姿を保育者に示してくれる。この意味で、幼児の真の発達の理解のためにも、共感的理解は不可欠である。

## 3 因果論モデルによる子ども理解と関係性モデルによる子ども理解

臨床心理学における考え方として、「因果論モデル」による対人理解と「関係性モデル」による対人理解がある。共感的理解による子ども理解は、「関係性モデル」による理解といえる。この二つの考え方を子ども理解に適用すると、次のようになる<sup>5)</sup>。

「因果論モデル」による理解とは、自然科学者が研究対象である自然現象を研究する際の理解の仕方である。自然そのものは、それを理解・研究する自然科学者自身の人としてのあり方とは、無関係に存在する。この意味で「1 発達の理解」は、「因果論モデル」による理解といえる。ピアジェの知能の発達段階説にしてもエリクソンの心理社会的発達段階説にしても、この考え方を基にして個々の子どもを理解する場合、その理解の内容は、理解する側の保育者が個々の子どもとどのような関係にあるかは、無関係である。

それに対して「関係性モデル」による理解とは、心理臨床活動における、治療者（カウンセラー）自身のあり方が、クライアント（来談者、心理治療を受けに来た人）の心理に影響を与えるので、治療者はこのことも踏まえて、来談者を理解しなければならないということである。先の「2 共感的理解」で述べた子ども理解においては、保育者の共感によって、子どもは保育者を信頼して心を開く。その結果、保育者は子どものあ

りのままの姿を理解することができる。この意味において、共感的理解とは、「関係性モデル」による子ども理解といえる。

共感的理解とは、このように保育者自身のあり方が、子どもに影響を与えていることを前提としている。この意味で、保育者自身が自分の状態を理解していること、つまり保育者の自己理解が重要となる。

#### IV 共感的理解力を高める保育者養成の取り組み

##### 1 感受性の育成と共感性の育成

「Ⅲ 幼児理解」で述べたように、幼児理解には発達的理解と共感的理解がある。発達的理解は、幼児に関する知的な理解であるから、一定の知識の学習によって修得される。一方共感的理解の能力（共感性）は、相手の心情をあたかも自分自身のものの如く感じて理解することであるから、単なる知識の学習では習得できない。物事を感じ取る能力、つまり感性を基盤とした理解力の修得が必要である。

感性（感受性）を中村雄二郎は、次のように定義している。「感受性とは、外界からの感覚的、感情的な働きかけを受け入れる、人間の心の能力あるいは状態。大別して、認知的感受性と情動的感受性との二つがある。前者は、感性知覚に基づいたもので、色彩、形、音の特性、匂いや香りについての感覚を豊かにしてくれ、この場合には感覚性とも呼ばれる。後者はより全体的なもので、快楽や苦痛の感情を受け入れる能力あるいは状態のことであり、この場合には感情性とも呼ばれる。またこの両者含んだ感受的な心的事実の総体をさす場合には、感性とも呼ばれる」<sup>6)</sup>

ここでいう情動的感受性は、共感性とほぼ同一と考えることができる。この定義からも分るように、感性には感受性と共感性の二つの意味があるが、感じ取るつまり「外界からの感覚的、感情的な働きかけを受け入れる」能力という点では、同一の能力である。

共感的理解は、心理療法の一つである来談者中心療法を体系化したアメリカのカール・ロジャーズが用いた概念であるEmpathic Understandingの翻訳である。Empathicの名詞形Empathyは、日本語では感情移入と翻訳されているが、もともとはドイツの心理学者で美学者であったテオドール・リップスが「心理学原論」<sup>7)</sup>で用いたEinfühlungが始まりであるといわれている。これは、人が美的対象へ感情移入する、つまり人が芸術作品に心を動かされる心理的働き（感受性）を説明するために、リップスが用いた概念である。こうした共感的理解の用語の成り立ちからも、感受性と共感性は、同一の心理的働きであることが分る。

それゆえに、感受性の育成は共感性の育成につながり、共感性の育成は感受性の育成につながるといえる。

以下、筆者が保育者養成の授業の中で行っている共感性と感受性を育成するための取り組みを述べる。

## 2 授業における事例の引用

筆者は担当する授業（発達心理学、教育心理学、臨床心理学、臨床心理学特論）の中で、理論の説明の際に事例を多く引用するようにしている。特に共感的理解や感受性の説明に当たっては、筆者自身が保育や教育の現場で、あるいは臨床心理士として、あるいは社会人として共感性や感受性が働いた事例、さらには文献などで、筆者自身が感動を伴って理解したもの、また学生が実習や実生活で共感性や感受性が働いた事例を用いるようにしている。その際個人情報についての守秘義務の遵守に配慮していることはいうまでもない。

## 3 春のキャンパス内の散策

4月ないしは5月の1年次の発達心理学、2年次の臨床心理学の授業の一コマを使って、キャンパス内の散策を行っている。学内の庭にはこの時期、ハナミズキや藤の花々、青葉若葉が茂り始めたポプラなどの木々、同じキャンパスにある付属幼稚園では桜や櫟の若葉が茂り、チューリップなどの花々も咲いている。散策にあたっては学生をいくつかのグループに分ける。事前の指導として、感受性と共感性についての理論的理解を深めるための講義を行っている。また当日の事前の指導としては、散策は学生をいくつかのグループに分けるが、友だちと会話を交わさず、できる限り一人の世界で木々や花々に接することと、見るだけではなく、若葉に触ったり、花や葉っぱの匂いを嗅いだり、木々に触ってみたりなど五感を使って散策することを助言している。

この散策にあたって、相田みつをが長年書き続けた言葉「うつくしいものを 美しいと思える あなたのところがうつくしい」を引用している。この言葉の最後の「ところがうつくしい」を、「心を無にして」あるいは「幼児のように素直な心」と解釈して、学生に説明している。この相田みつをの言葉は、キャンパス内散策で自然と関わる際に、学生に有益な視点を与えている。

以下は、平成19年5月に幼児教育学科1年生を対象に実施したキャンパス内の散策後に、学生が提出した「授業で学んだ感性」と「散策の感想」のレポートの一部である。

### 授業で学んだ感性について

- ・私は、感性は大人になると、どんどん無くなっていくものだと思っていた。しかし講義を聴いて、自分の感性を豊かなものにするには、その人の行動や働きかけでどれだけでも良くなると思った。自分から自然に触れたり、美しいものに会うことが大切だと思う。
- ・感性の中に、感受性と共感性があるのに少し驚いた。感性は感受性しかないものだと思っていた。
- ・この授業を学んでから意識して周りに咲いている草や花を見るようになり、実際に山や海に出かけ、自然を感じるようになった。
- ・感性を豊かにすることは大切だと聞いたことがあったけれど、どうしてそんなに感

性が大切かということは、今まであまり深く考えたことはなかった。しかし授業を受けて、どうして感性が大切なのかやどうしたら感性が育つのかなど、初めて分かったことがたくさんあって、すごくためになった。

- ・授業で感性を学んでから、自分も少し変わったと思う。学校から駅までの道を歩いて帰りたいと思うようになった。今まではバスで早く通り過ぎていた道だったが、歩いて帰ることで、木の葉や花、そして山がとてもきれいに見えることに気付いた。自然を見ながら帰ると心が軽くなると気付いた。

#### 散策の感想

- ・木や花を見ることはあったけれど、においをかいでみたり、触ってみることは久しぶりだった。葉っぱに触るとほんとうに「自然」な感じがした。人工的なものではなく、太陽や雨や土といった自然なものに育てられているのだと感じた。中庭の藤の花はとてもいい香りがしてなつかしかった。春のおいだと思った。身体を使って、心で自然を感じた。散策が終わった後は、さわやかな気分で気持ちが良かった。体中がすっきりした気がした。
- ・ポプラの木の葉っぱは、とてもなめらかな感じがした。中庭では藤の花びらが風に飛ばされたり、舞ったりしていてとてもきれいだった。花びらのあの淡い紫色が何とも言えない美しさだった。藤の花の甘い香りが風に乗っていた。幼稚園に行くとき、まず太陽の光で輝いた木や草がすごくて、子ども達がとても元気に遊んでいた。桜の葉っぱはとてもすべすべしていた。沢山の花はきれいに咲いていて、癒された。どの花にも虫がたくさんいて、つくづく春だなーと感じた。散策してとても気持ちが良くなった。また行きたい。
- ・今までずっと前庭の背の高い木が気になっていて、今日その木がポプラだと知って嬉しかった。ポプラという名前は聞いたことがあったけど、実物を見るのは初めてだった。木はすらっと高く、思わず見上げてしまう綺麗な木だ。この間学校帰りにポプラの木を見上げると、ずっと上の方に付いている葉の横に細い月も出ていて、とっても美しかった。藤のつるは花の所だけが紫色になっていて目立つけれど、優しい色なのでいいなあと考えた。ハナミズキの木は、一本でも美しいけれども、木が並んでいたらより美しく感じた。
- ・いつもこの木の前を何気なく通っているのに、ポプラの木の大きさに驚いた。自然を実際に自分の目で確かめて触れて、感じることによって、こんなにも物の見方が変わってくることに今初めて気付かされようと思う。外は暖かく、風がおだやかに吹いていて、これが青春なのかなと少し思った。
- ・私は木の下に入って上を見るのが好きなので、入ってみた。木の葉の間から見える光がきれいだった。その光を受けて葉っぱは透き通って、緑の葉が黄色や赤色に見えた。木は強く真っ直ぐに伸びていて、見習いたいなと思った。音は、初めは聞こえないと思っていたが、葉同士が触れ合う音が聞こえた。とても優しくて壊れそう

な音だった。葉は触ってみると柔らかくて温かだった。葉は普段触ることがないので、柔らかいということが信じられなかった。

#### 4 授業前10分間読書の実施<sup>8)</sup>

筆者は、平成14年度から幼児教育学科1・2年の全授業で、授業前10分間読書を実践している。取り組みのきっかけは、全国の多くの小中高で行われている朝の読書運動であるが、取り組みの理由は、以下の2点である。

ひとつは、学生の読書の習慣形成の一助としたかったことである。平成13年から施行されている「子どもの読書活動の推進に関する法律」第2条では、子どもの読書の意義について「子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものである」と述べている。もうひとつの理由は、学生の授業への集中度を高めるためである。

10分間読書の方法は以下のとおりである。授業開始後の10分間を充てる。本は雑誌・漫画・写真集・趣味や健康法等の本以外であれば、小説、学術書等の分野は問わない。読書感想文等の課題はないが、新しい本に替えるときは、書名・替えた理由等を記入した読書カードを提出する。学生は、学籍番号順の席に座る。この10分間に、筆者は以下の作業を行う。①机間巡視を行いながら出欠確認②黒板清掃③時間があれば当日の授業内容見出しの板書。

平成18年1月に2年生を対象としたアンケート調査では、99%の学生が、「とても良かった」「良かった」と回答しており、良かった理由として、多くの学生は、読書の楽しさと授業への集中が高まったことともに、読書からの感動の体験を挙げている。またアンケート結果から、読書の習慣化にも好影響を与えていることが推測された。10分間読書が、学生の感性の育成にも好影響を与えていると考えられる。

#### 5 臨床心理学の授業におけるロール・プレイングの導入

ロール・プレイングRole Playingは、役割演技法と翻訳されるが、本来はカウンセリングを学ぶための体験学習で、学習者が相互にカウンセラーとクライアントの役を演じて、それぞれの立場を理解する方法である。この体験学習は、保育者が子どもとどのように関わるかはもちろん、学生の共感性の育成に有効であると考えて、筆者は以下のように臨床心理学の授業に取り入れている。

短大での最後の実習である学外幼稚園での教育実習が、2年次の9月下旬から10月初旬にかけて実施される。臨床心理学の授業では、受講学生全員に、この実習経験を基に共感的理解に関する、以下の二つの事例レポートを実習後に提出させている。ひとつは「①共感的理解に基づく実習学生の子どもの関わりの事例」、もうひとつは「②実習園の教員の子どもの関りで共感的理解の観点から印象に残った事例」である。

実習後の授業では4人を1グループとして、そのグループ内で①②の事例を発表させ、



その上で、グループごとに①②で各1事例を発表用を選ぶ。発表用の事例については、グループでシナリオを作成し、それをもとにしたロールプレイを、クラス全員の前で演じる。各グループのロールプレイは、見学したそのグループ以外の学生によって、以下に示した評価票で評価する。

全グループが発表後にこの評価票を集計して、①②の事例ごとのベスト3を決定している。学年は2クラスあるので、計12事例が選ばれることになる。3年前からはこの12

R o l e P l a y i n g 評価票 採点者 組 番 氏名 _____		
〔 実習生の事例 ・ 先生の実例 〕		
第 班	題名 [ _____ ]	
内 容	表 現	合 計 点
3 非常に良い	3 非常に良い	
2 良い	2 良い	
1 普通	1 普通	
個 人 演 技	・ 2点 氏名 ( ) ・ 該 当 者 な し	・ 1点 氏名 ( ) ・ 該 当 者 な し

発表する時に心がけること

- ・ 自由に楽しく演ずる。
- ・ みんなに伝わるように、ゆっくりと大きな声で演ずる。

の事例を、年度末の1年生と2年生の全員の合同授業で発表することになっている。

以下は、平成20年1月に幼児教育学科2年生が提出したロールプレイングの感想文の一部である。

#### ロールプレイングは子どもや保護者への関わり方や共感的理解の学習に役立ったか

- ・ 話として聴くよりもロールプレイングを見る方が感情移入しやすかったし、演じる側になった時もそうだったように思う。
- ・ すごく役立ったと思う。実際にやってみて、子どもはこんなことを思うのだと分かった。見ていても、泣きそうになることがあった。
- ・ とても役立った。最初は恥ずかしさがあるけれど、演じているうちにアドリブも入りほんとうに怒ったり、せつなくなるなど心に残った。
- ・ その役割を演じないで見てのだけでも、子どもの気持ちや保護者の気持ちが伝わってきた。
- ・ 実際に演じてみると、それまで気付かなかった子どもや保護者の思いに気付くことがあった。

#### 講義による学習とロールプレイングによる学習には、どのような違いがあったか

- ・ 体験することによって、体験しなければわからない感情に気付くことができた。事

例を聞くだけだと、その子がなぜそのように思ったか、ということに気付きにくいと思う。

- ・実際にやってみることで、その時の思いになれ、その子の思いも理解できたように思う。
- ・先生は授業でも事例をよく出されるので、両方とも参考になったが、ロールプレイングは心が動かされる感じがした。
- ・講義では共感の意義や大切さを頭で理解し、ロールプレイングでは、目で見たり身体で感じたりしながら、大切さを心で理解したと思う。
- ・実際に身体を動かして行うので、覚えやすく感情移入がしやすかった。

## V まとめ

本稿では、幼児理解における共感的理解の重要性についてふれるとともに、その能力を保育者養成において高めるための筆者の取り組みについて述べた。共感的理解は、保育者の感性に基づく子ども理解である。現行の保育所保育指針では、保育士に求められる資質のひとつとして感性をあげ、「第1章 総則」で次のように明記している。

「保育においては、保育士の言動が子どもに大きな影響を与える。したがって、保育士は常に研修などを通して、自ら、人間性と専門性の向上に努める必要がある。また、倫理観に裏付けられた知性と技術を備え、豊かな感性と愛情を持って、一人一人の子どもに関わらなければならない」<sup>9)</sup>

保育者の子どもへの共感性の育ちは、子どもへの愛情を深める。この意味で、保育者の感性の育ちと子どもへの愛情の育ちは、相互に密接に関わっている。

しかし平成19年12月に公表された新保育所保育指針（案）では、感性と愛情が省かれて、「第1章 総則」で以下のように表記されている。

「保育所における保育士は、児童福祉法第18条の4を踏まえて、保育所の役割及び機能が適切に発揮されるように、倫理観に裏付けられた専門的知識、技術及び判断をもって、子どもを保育するとともに、子どもの保護者に対する保育に関する指導を行うものである」<sup>10)</sup>

省かれたことの一因は、感性と愛情との理論的解釈が、保育・教育関係者で共有化されていないことにあるのではないかと思われる。保育者の感性の豊かさは、保育者の個々の幼児理解の深さを左右するものである。今後とも、保育者の感性の育成に、保育者養成の立場から尽力していきたく考えている。

## 参考文献

- (1) 小芝隆 1974 フレーベルの幼児教育思想 富山女子短期大学紀要第7巻
- (2) 小芝隆 1979 モンテッソーリ教育法の基本的原理とその考察 富山女子短期大学紀要第11巻

- (3) 波多野完治編 1965 ピアジェの発達心理学 国土社
- (4) Erikson, E. H. 1959 Identity and the life cycle. Psychological issues. International Universities Press. (小此木啓吾訳編 1982 自我同一性－アイデンティティとライフ・サイクル 誠信書房)
- (5) 河合隼雄 1992 心理療法序説 岩波書店
- (6) 中村雄二郎 1984 大百科事典 3 平凡社 P976
- (7) Theodor Lipps 著 大脇義一訳 心理学原論 岩波書店 1934年
- (8) 小芝隆 2007 保育者養成校における「授業前10分間読書」の取り組み 日本保育学会第60回大会研究論文集
- (9) 厚生労働省 1999 平成11年改訂 保育所保育指針 フレーベル館
- (10) 厚生労働省「保育所保育指針」改定に関する検討会 2007 保育所保育指針の改定について（報告書）
- (11) 小芝隆 2006 幼児の感性とその援助 日本保育学会第59回大会研究論文集  
(平成20年1月15日受付、平成20年2月15日受理)